

なろうか。

1、葉山御用邸内遺跡は、三浦半島に類例の少ない海岸に面した砂丘上に営なまれた遺跡である。

2、かつて古墳もあったが、古代および近世の集落址でもあると考えられる。

3、旧御殿の建設工事等による攪乱が著しく、遺構の遺存度は非常に悪かった。

4、古代については、古墳時代後期の堅穴住居址一軒が検出されたほか、同時期および古墳時代前期・奈良時代・平安時代の日常什器類が多数採集され、長期にわたって生活が営なまれたことが判明した。

5、貝包丁は、その使用年代が明確でないが、古代のもので、稲の穂摘具としてよいとすれば、漁撈生活の考えられやすい海岸の立地にもかかわらず、水田農耕を考慮する必要性を示している。

6、近世の住居址と断定できるものはなかったが、日常什器としての陶磁器が多数出土し、御用邸開設前にはここに民家もあったことから、敷地内に近世村落のあったことが窺われる。

7、擬餌針および大量の土鍾などの漁撈具の出土および混貝土層の存在は、この村落が漁業に携ったことを明らかにしている。

8、溝状遺構、円形堅穴遺構など、時期および性格を確定しがたい遺構がある。

なお、本稿を草するに際し、擬餌針・土鍾について田辺悟氏の、陶磁

器について長谷部楽爾・井上喜久男両氏の御教示を得た。

(笠野 毅)

(附) 葉山・一色古墳の遺物

赤 星 直 忠

(一) 一色古墳に関する文献資料

葉山御用邸内古墳について記されたものとしては、『古墳横穴及同時代遺物発見地名表』(東京帝国大学発行 明治三十六年再版)に次の記載がある。

相模国……三浦郡葉山村大字一色 古墳

石槨、人骨 佐藤伝蔵報 人二四六号
骨鏃 三三四頁

『東京人類学会雑誌』第百四十六号(明治三十一年五月二十八日)には次の記事がある。

○古墳と骨鏃 古墳より骨鏃を出すとの事実は芝丸山の古墳を除く外従来餘り聞かざる所なるが、友人小林和止氏の言に依れば、相模国三浦郡葉山村字一色宮内省御料地内御用邸建築中、海辺より壱町許の所にて地下凡そ八尺許の處の石槨中より、人骨と共に図に示す如き骨鏃を発見せりと云ふ。実物を一見したるのみにては殆ど石器時代の遺跡より発見する者と区別する能はざるなり。(佐藤伝蔵)

(二) 実教寺と一色古墳遺物

実教寺（日蓮宗 葉山町一色一三五五）に御用邸内古墳出土遺物が保存されていると聞いて調査（昭和四十二年四月）したとき、出土品のほかに寺に保管されるに至った経過を示す『送り状』と現在本堂前に立つ「古将墓」に記す『古将之墓記』が巻物として保管されていることを知った。

本堂前には切石積方形基壇上に二段の台座を置いた扁球頂柱碑が立ち、正面に「古将墓」、左に「古将之墓記」、右に「明治四十一年八月十六日建之 当山二十五世 日解聖人」と刻む。二段の台座に発起人名と費用寄進檀家名を刻んでいる。切石積方形基壇内には一色古墳出土人骨が納められているという。寺に保管されている遺物は骨鏃四点・鉄鏃（平根式）三点・直刀断欠四点であり、『送り状』に「鎗」と記されているものは存在しない。

(三) 考察

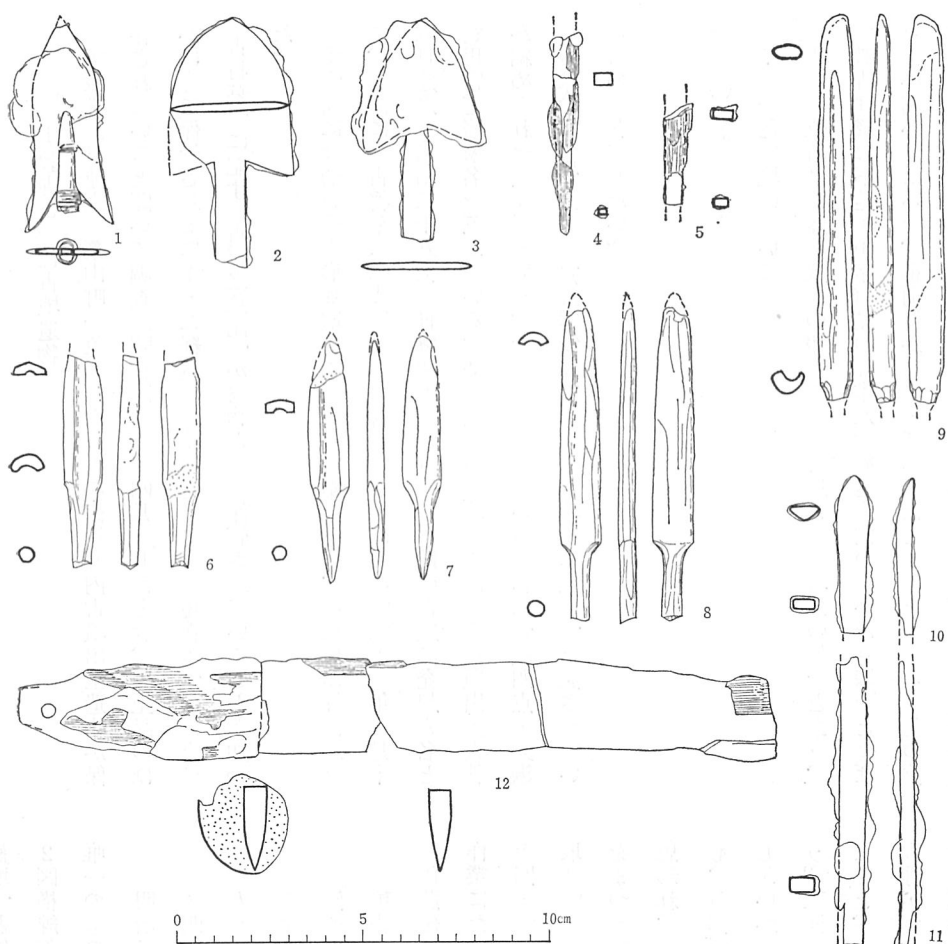
イ 一色古墳について

古墳の位置は佐藤伝蔵氏の報告には「海辺より壱町許の処」とあり、実教寺住職は旧地主小字打鯖の鈴木八兵衛地所内の「いなり塚」とよばれた小高いところで、稲荷社がまつてあったところと伝える。その位置は八兵衛孫（一色一七九五住、鈴木新太郎）によって「打鯖二一〇四

番地」と知らされた。旧切図によってその位置は旧御殿北端中央辺（第2図横線部分）とわかった。人骨出土状況については『古将之墓記』が唯一のもの。

明治二十六年葉山御用邸御建築地盤鋤取りノ際人骨ヲ発掘セラレ其ノ四面ハ丸石ヲ以テ囲ミ恰モ巨大ノ石棺トナシ七人ヲ合祀アリ内一人ハ将ナルベシ石棺ノ中部ニ横臥セシメ其ノ前ニ婦人一人及齡十二三ノ少年ト認ムル者一人左右ニ二人ツツ四人聯列アリ骨格壯大身軀何モ六尺已上ト思料ス熟考スルニ該遺骨ト共ニ角製及鉄製其他武器類葬リアリシハ往昔戦死者又ハ殉死者ノ屍ヲ祀リシナラン

佐藤伝蔵氏の報告は「地下凡そ八尺」とある。古将墓に記すところは作業にたずさわった人達から聞いたものと思われる。「四面ハ丸石ヲ以テ囲ミ」とあるから佐藤氏が記すごとく石槨であろう。「御建築地盤鋤取り」と記し、筆者聞書には「鈴木八兵衛地内の小高いところに稲荷社をまつていたところ」とあるから、砂丘上に作られた円墳であったと思われる、主体部は丸石積の石槨と考えて誤りあるまい。古墳の大きさも、石槨の深さも不明である。丸石積とあるが付近に堅い河原石は存在しないから、海岸に散在した凝灰岩塊が集められたものとしてよからう。三浦市三戸光照寺南方台地にあった古墳が開墾されたときの実見によると、主体部は地下にあり、泥岩塊を積みあげた低い石槨であった。人骨が多数納められていたらしいが、三浦半島での古墳・横穴の例からすればいずれもが風葬後の二次埋葬であったはずである。一色古墳人骨



第13図 実教寺所蔵の葉山御用邸内一色古墳の出土品 (1/2)

は鈴木八兵衛が実教寺檀家であることから実教寺に供養
埋納されたものであろう。

ロ 送り状と遺物

人骨に伴出した遺物が実教寺にあるが人骨とともに寺
に納められたものでないことは『送り状』によってあき
らかである。

送り状

角製矢根 同下ナシ 同上ナシ下ナシ 鉄製矢根

鉄製矢根三ツ折レ居ル 鎗 小剣四ツニ折レ居ル

合八品 但シ拾四包外ニ式包

右之通正ニ葉山一色村へ送付仕候間御納手被下度候
也

明治廿八年三月吉日

一見栄次郎

鈴木頼学様

鈴木頼学は名主、一見栄次郎は檀家の一人。昭和四十
二年調査のとき住職から聞いたところによれば出土品は
東京に持ち去られていたが所蔵者病死により村に返され
たものという。『送り状』の絵は要を得たもので、現存
遺物とくらべて直ちに判別できる。寺には『送り状』に

記されていない骨鏃の良好資料がもう一点ある。骨鏃は身部と茎部とからなる（第13図6・9）。三浦半島の横穴からの骨鏃の出土例では、長さ一二～一三センチ、身部断面はレンズ状で、茎は細く短かいものが多い。二例は似ているが二例は異なる。横須賀市船倉横穴・同なたぎり遺跡に出土例がある。異なる二例は、柳葉形に似た短かいもので、これと同じ形の骨鏃は三浦市南下浦町海岸の海蝕洞穴内弥生期貝塚出土品にある。鉄鏃（第13図1・5）は、みな数個に折損してしまったが出土数だけある。いずれも平根式に属し、かえりが後方にむく。注意すべきものは『送り状』図の上方に書かれているもので鏃身の中央をたてに両面からはさんだあとが残存するもの。これは二つ割になって鏃をはさんだあとで、古い様式の鏃にのみみられる。類例は横須賀市佐島横穴から出土している。「鎗」と記すものは現存しないが、大きさと形からみて、鈍か尖根鉄鏃と思われるもの（第13図10・11）がある。「小剣四ツニ折レ居ル」は現存する（第13図12）。比較的小形の直刀断欠である。三浦半島からは剣の出土例がきわめて少なく横須賀市島崎A横穴に一例ある。以上の遺物中に剣の存在すること、篋先で鏃をはさむ平根形の鏃があることは両者とも比較的古い古墳・横穴に存在する遺物であることから考えて、本古墳はやや古い時期のものであると推定される。

四 ま と め

発見時の詳細が全く不明だが海岸の砂丘上に作られた比較的古い時期

の古墳と考えられ、岩塊積石槨中に幾体もの人骨が埋納されていたようである。三浦半島は戦前要塞地帯であった関係で学術的調査がきわめて困難であったため、記録として残されていることが少ない。庶民生活の歴史を明らかにすることは戦後大事な研究になったが、実施されたことがほとんどない葉山町としては、些少な資料であっても葉山町の歴史を明らかにする上からはきわめて大切である。そのような観点からすれば一色古墳資料はささやかな残存でしかないとしても、価値はきわめて大きい。